
竜王の系譜（仮）

千野甜瓜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜王の系譜（仮）

【Nコード】

N3190BA

【作者名】

千野甜瓜

【あらすじ】

竜王。高校一年の鳴神竜彦はその話に飽き飽きして^{なるかみたつひこ}いた。そんなある日の帰り道、「竜王に興味ない？」と言うボロ布を纏った人物に出会う。戦きに震えつつ竜彦が興味がないと答えると、たちまち光と共に人影は消えてしまう。奇妙な出来事を気に留めて竜彦が家に帰ると、自分の部屋にボロ布を纏った少女が。霊だと思い込み少女と話すうちに、竜彦はその少女が竜だと知る。竜彦は少女に「戦わなくてもいいから守ってほしい」と言われ……………竜の王様の座を巡る、竜族の少女と人間の少年の物語。

ジャンルはアクションとラブコメです。

更新不定期。二か月に一回だったりすることもあります。

出会い？

また聞こえた。最近俺の周りや世間は騒がしくなっている。ちょっとした噂話で。

「ねえ竜王って言う人また出たらしいよ」

「マジで？」

「うん。駅の裏側の通りで竜王に参加しないかって聞かれたらしくてさ、嫌だって言ったら何もなかったって」

「じゃ死なずに済んだんだ」

近くの席の女子2人の会話に、ばかばかしいと心の中で笑った。

竜王。最近何かと騒ぎの中心になる言葉で、飽きるほどに聞きなれた言葉だ。

知らない奴が突然声をかけてきて、竜王っていうゲームをやらないかとか、王様になりたくないかと言ってくる。その時点でおかしな話だが、それにイエスとかうんとか答えると、攫われたりして数日後に死ぬ。

そんなしょうもない都市伝説が俺の周りでは流行っていた。現にこの1-2にいる教室でも皆が話しているのだ。

俺は、そんな馬鹿みたいな噂には最初から興味がなかった。

そもそも竜王というゲームをやっている奴を、俺は見たことが無い。いや、ゲームなのかどうかも最近では怪しくなっている。

最初は誰もがテレビゲームだと思っていたはずだ。だけど、誰もそんなゲームをやっていない。発売されたことすら誰も知らない。それが嘘だということに気づいた奴がいたからなのか、今度は誘拐や都市伝説風の噂に変わっていった。

その噂も最初はカワイイ子を攫うだとか、カッコイイ奴を攫うだ

った。俺は男を攫ってどうするんだとか思ったけど。そんな誰かを攫うはずの竜王とかいうゲームは、噂が噂を呼んだのかそういう噂を誰かが作ったのか、今では死人が出るゲームへと変わり果てていた。いや、既に誘拐だ死人だと言っている時点でゲームですらないゲームだったらやってみたいとは思ってたけど、死ぬようなゲームをしたいとは思わなかった。ゲームして死亡。死に方としてはどうにも言えないくらい情けない。本当に死んでも死にきれない死に方だ。

「りゅうくん」

と、いつのまにか考えていた俺にいつもの調子で呼んできた。角田だ。教室の後ろの入り口へと体を向け、軽く握り拳を作る。

明らかに朝から元気そうな奴が走って俺の方へ向かってくる。寝ぐせバツチリ、バッグを手にぶらりと提げた男。角田光輝（つのだひかり）だ。そいつへと拳を作った右腕を前へと出す。

「それで呼ぶなっっていつてんだろ」

軽く突き出した拳が角田の腹に当たる。拳を解くと、角田はパンチが当たった腹に手を置きながら、いかにもぬけている笑顔で言った。なぜかこいつが笑うと癒されて楽しくなる。不思議な雰囲気を持っている。

「じゃあドラゴンヒコーキ」

「ちがーう」

「それじゃあ、たっちゃんひこまるのすけ」

「誰だよ。つか俺の名前の原型どこいった」

「たっちゃんのたっ、と」

そこで説明を止めさせた。いや止めた。俺の名前は鳴神竜彦だ。なるかみたつひこ
ひこまるのすけでも、ヒコーキでもない。まして、たっちゃんでも
りゅうくんでもない。

説明を止められて、いかにもつまらないという顔を向ける角田に
言葉を返す。

「ヒコーキはお前のほうだろ」

「俺飛べねえよ。翼がねえから」

「あつたら飛ぶのかよ」

角田が俺の肩に手を置いた。途端に視界が揺れる。角田がガクガクと俺を揺らす。

「飛ぶのが人だろ。翼あつたら飛ぶのが人だろ」

わかったと連発する俺からようやく角田は手を放した。人をふるいみたく揺らしといて笑っている。人を揺さぶって面白いかと聞きなくなる。だが、俺だつたら間違いなく面白いと答える。

ふざけて笑っている角田に一つ疑問を感じた。

角田は元々テンションがバカみたいに高い奴だ。しかし、朝からテンションが高いことはあまりない。朝から徐々に上がっていつて昼辺りに爆発する。そのほうが余計迷惑なんだが。朝は普通の角田だ。だからこそ、なぜここまで気分がいいのかわからなかった。

自分のバッグをなぜか俺の机に置く角田に、何かあったなと踏んで聞いたです。角田の席は一番後ろの俺の席からすぐ目の前だ。そ
うちに置けと言つと素直に従った。

「お前なんかあつたのか？」

「おつ聞いたな。聞くんだつたら最後まで聞けよ」

やけにノリ気で押してくる。にやけてる辺りが危ない。そこまで押されると逆に引きたくなる。

引き下がれるなら引き潮みたいに下がりたい。そんな気持ちを察してか、俺の思いを知らず角田はイスにまで手をかけた。逃がさないつもりだ。話し終えるまで。

仕方なく聞く。聞けば終わるのだから。

「アレだよ。竜王」

タブーだ。そう思ったのもすでに遅かった。

調子よく角田が喋りだす。

「竜王っていう奴にあつたんだよ。声かけられてさ、うわっ死ぬのかなとか思ってたんだよマジで。ヤベー死ぬとか誘拐するなら美人がいいとか思ってたんだよ。で、嫌だつて言ってたんだ。そしたらそこからがスゲーなんだつて」

聞きたくないものを聞くのがこんなに辛いとは思わなかった。楽しそうに話す角田に対して、俺はいつそのこと攫われると思った。けれどそれは口にはしない。言つていい事と悪い事がある。例えば本心から言いたくてもだ。

一人盛り上がつてスゲーを連発する角田に俺は先を進めさせる。死ぬと思ったところがそんなにスゲーのかと思うほどに言ってるからだ。

「で、先は？」

「顔を覗いたんだよ」

緊迫した状況で顔かとツツコミたくなった。死ぬところはどこでもよかったらしい。

「マジでメツチャカワイイ子だったんだって」

聞き捨てならない事を角田は言った。

「女だったのか？」

「そうなんだよ。しかもメツチャ美人。アイドル並み、いやアイドル以上の女の子でさ、この子にだったら攫われてもいいかなあって思ってたんだよ。けど、その子、わかったごめん、って言ってさあ、去ってっただよ」

喋りとおした角田に適当に返事をした。俺が聞きたかったのは竜王と言ったそいつが美少女だったことじゃない。そいつが女だったことに驚いた。俺はてっきり男だと思っていたからだ。

子供を攫ったり誘拐するのはニュースでみると大抵男だ。だからこそ角田曰くの美少女が誘拐していることに驚いた。

だが、それで攫われているのなら納得もいった。美少女が誘ってきたならその話に普通乗る。俺も断るが惜しいとは思っただ。

「惜しいよなお前。攫われて殺されなくてよ」

「だよなあ。いや死にたくはないんだけどよ」

「いつそ死んで生まれ変われよ。真面目で誠実なやつに」

「誠実じゃ俺。ちゃんと思った事言っただろ」

それは単に馬鹿で素直だけだというのは止めた。

「それ誠実じゃねえから。ただ素直なだけだっただけ」

「おっ、純粹ってこと」

下心が見えていて純粹。それはかなり恐ろしい事だと思った。そいつが普通なら世の中どうなるんだか分からない。常識を覆すところとは認めるが、一緒に全世界が崩れるような気がした。秩序もへつたくれもない世界。角田の下心で世界が恐怖に陥る。かなり危険な世の中だ。

それから角田と美少女らしい竜王の話をして、ホームルーム、授業を終えた。

そうして下校の時間を迎えたが、俺には納得がいかない物があつた。竜王と声をかけるのが少女だったことだ。別に美少女には興味がない。竜王に関しては。

部活をしていない角田や他の友達と遊び、少しばかり暗くなった帰り道を一人で歩きながら考える。四月も終わる。もうすぐゴールデンウィーク。そんな楽しみが胸の中で踊る中どうしてもあることに心が向く。竜王と声をかける不審者についてだ。

なぜ少女が人を攫うのか。攫ったところで何の得になるのだろうか。人を攫って売る。人身売買だとしても、男を攫って金になるのだろうか。仮にそれが金になったとして、そこまで金に困ってる、としたらかなりおかしい。そのうえで噂では死人がでる。人殺しをしたら金にも何にもならない。矛盾だ。

そもそも角田が言っているだけで少女だとは決まってる。角田が見たのが少女だっただけで、オッサンかもしれないしオバサンかもしれないなかった。ありえないだろうけど、中学生や小学生だってありえた。竜王と言えば皆が騒ぐのだから。

そんな風に疑問を持って悩んでるうち、自分が竜王を信じてるようになっていたことに気がついた。決して竜王という可笑しなゲーム、都市伝説を信じているわけじゃない。変な話を聞いたから考え

たてただけだ。

竜王はただの噂話。ローブを纏った人間だとか、殺人鬼のような目だとか、銃や包丁を隠し持っているだとか、美少女だとかは面白くない誰かが言った事。ただの妄想で夢の話でしかないのだ。バカみたいな噂話を頭からとっばらった俺を次の瞬間衝撃が貫いた。

「ねえ竜王って興味ある？」

竜王に興味ある。今払った噂話と角田の話が頭を過る。嫌な予感に振り向いた。

「わっ、なんだお前」

本当に目の前だった。向いたすぐ後ろにボロボロを纏った人間が立っていた。背後霊のような姿に俺は思わず仰け反った。薄暗い街路でそんな人間がいたら誰だって仰け反るし逃げたくなる。

背後に立っていた人間を俺は怪訝な目で見まわした。

そいつは頭から布のようなものをかぶり顔はよく見えない。背は俺よりも低く胸ぐらいまでしかない。160がいいところだろう。もう少し低いかもしれない。

そして、纏っている布は擦り切れていて、ゴミの中に埋もれていたかのような汚れまでついている。漁ってきたのかと疑いたくなるほどのボロボロだ。

ボロボロの布をフード見たく被った、どこから見ても怪しい人間。

俺は咄嗟にポケットの中に手をつっ込んだ。誰かしらに電話だと思ったのだ。

ケータイを取る俺に怪しい人物が声をかけてきた。

「ねえ竜王って興味ある？」

良く聞けば艶やかな女の声。やっぱり角田の言ったとおり女だと確信した。

「ねえよ。つかお前誰だ」

答える俺に女らしき人物が声を上げた。嬉しそうな口調で。

「ないの。王様になれるんだよ」

「その王様ってのにも竜王ってのにも興味ねえよ」

「ホントに？」

喜んでから疑うような聞き方に恐怖が増した。しつように竜王になりたくないのかを聞いてくる。まるで脅迫されてる気分だ。改めて誰もが頷いたり、怖がるのが分かる気がした。これに答える言葉の一つで生き死にが分かれるなら、答えない方がマシだと考える。けれど、これでもう一度聞かれたら、思わず答える。間が空くことが怖いのだ。

動きの止まった俺に謎めいた人物が首を傾げた。

「ねえ、ホントに竜王になりたくないの？ 王様を目指したくないの？」

口が動く。答える気はないが、答えない方が余計恐ろしい。

「あ、ああ。俺は王様とかには興味がない」

しつかりとゆつくりと答えた。まるで言わされてるみたいだ。いや、自分で答えようと思っっているのは確かなのだが、そう言わされてるような聞き方だった。

俺が答えた直後目の前の人物が動いた。布の中でごそごそと何かが動く。恐らく手だ。手で何かを持っているのかもしれない。

嫌な考えが浮かんた瞬間、ケータイを持つ指が動いた。家への電話だ。今の時間なら瑠美るみがおふくろがいた。電話を繋つごうとボタンを押したその瞬間、

「誓って」

そう言われてボタンを押す指が止まった。

はっとした顔で前を見る。ボ口布の隙間から青白い光がキラリと光った。危ない予感。

逃げ出したいが足が動かない。

「誓え。『我竜王の采配より見いだされしもの。健全なる心を持ちてあらゆる者に挑み、誰も殺めることなくそれを慈しむ。裏切りは許すことなく死を持ってそれを返し、恨むことなく死へと旅立つこと。我が身を汝に託し、託されし汝は戦場に我が身を投じ、竜王の名を継ぐ者として約束を果たす』と」

硬直する。何も言えず、分からずただ立ち尽くす。ケータイが手から落ちるのでさえ分からなかった。

気付くと目の前のボ口布を纏った人物は消えていた。

俺の記憶にあったのはボ口布を纏った人物が突如物凄い勢いで喋ったことだけだった。何を言っていたかは前半の部分すら覚えてない。いや、ほとんど聞いていなかった。長く早口に喋ったことに驚きすぎて何も聞こえてなかった。

覚えてるのは暫えといきなり叫んで、棒読みの文章のごとく何か言ったただけだった。光ったなにかも全く分からない。ただ何か難しいことを謎の人物が言っただけしか頭になかった。

突如受けたあまりの衝撃にしばらくその場を動けず、ようやく動いた時には10分が過ぎていたことを、拾ったケータイで知った。ケータイは誰のおかげか分からないけど無事だった。あと、自分自身も。

その後もぼんやりとしたまま家に着いた。どう帰ったかは覚えていないけど、恐らくいつも通り帰ったはずだった。

俺の家はどこにでもありそうな普通の一軒家だ。二階建てで門がついている。庭は小さな縁側がある程度。至って普通の家だ。

黒い色に曇りガラスの付けられたドアを開けて中に入る。玄関でただいまと一言言うのが日課であり決まりだ。

お帰りと合わさった声が居間から返ってきた。妹の瑠美るみとおふくるだ。二人で何か作っているに違いなかった。いつもそつだからだ。

靴を脱いで土間から上がる。玄関の右前には二階への階段。二階にはそれぞれの部屋がある。俺と瑠美とおふくるとばあちゃんじいちゃんのだ。うちは五大家族で、親父はいない。

玄関から廊下を少し進んで左が居間。自分の部屋に行った後で入ろうと思った直後、居間のドアが開いた。

「お兄ちゃんお帰りー」

陽気な声で迎えられる。妹の瑠美るみだ。にこにこ笑っている。中学生になってから、そのぼやとした笑い方がどこか角田に似ている。間違っても角田の妹じゃない。俺の周りには、そういうのほほんとした笑い方をする奴が多いらしいのだ。なぜか。

二階に上がるうとして、瑠美るみに止められる。

「門限は守らないと」

「ないだろ、門限なんて。いつ決まったんだ」

「今決まって、今が門限」

「六時は早いだろ」

「じゃないと、お兄ちゃんが人攫っちゃうから」

「しねえって。誰がするかそんなこと」

言い返して、さっきの事を思い出した。

突如現れたボロ布の霊。現れて消え、光ったあたりを見ると完全に霊だ。

恐らく、捨てられたボロ布に愛着がわいて乗り移ったのかもしれない。恐ろしい話だ。ボロ布に愛着がわくなんて。

嫌な物を見たと頭の中から追い出す。瑠美るみがはにかんだ。

「早く降りてきてね。餃子だよ餃子」

「よっしゃ」

どこか嬉しくなって階段を上る。餃子は俺の好物の一つだ。

階段を上って自分の部屋のドアを開けた。いつもの部屋が出迎える。

フロアリングの部屋。ドアの真ん前には勉強机。左手にはベッドと窓。本棚があつて有名なミュージシャンのライブのポスター。そして一応綺麗に片付いている部屋。殺風景と言われればそれまでだが、言われたことがないので寂しい部屋でないらしい。

餃子の事を考えながらドアを閉めてバッグを投げ出す。脱ぎ捨てた部屋着を手にとった。早く着替えて飯を食いたい。変な事が起きて余計に腹が減っていた。

着替えるためにシャツを脱ごうとして、

「ねえホントに竜王になりたくない？」

その声にバツと振り向いた。

白いカバーのベッド。俺のベッドの上にボロ布の霊が座っていた。

思わず仰け反り後ろの壁にぶつかる。何も置いていないから痛みは壁だけで済んだ。だが、不意打ちの激突は痛い。

痛む頭を押さえて目を開けると、目の前に霊が移動していた。俺を見上げる形なのに顔が見えないのがさらなる恐怖をそそる。

「わっ！　つかお前なんだ。さっきの言葉呪いか何かか」

「呪い？」

聞いてきた。さっきから聞いてばかりの霊だ。

想像以上にボロ布が目の前にいると怖い事に気が付く。

「さっき何か言ってたろ。わけわかんない言葉」

「誓いのこと」

「しらねえけどそれだ」

「呪いじゃない」

「じゃ、なんでお前ココにいるんだよ。着いてきたんだろ成仏できずに」

「じょう、ぶっ？」

霊が首をかしげる。死んだことにすら気づいていない。死んだことを自覚してない。だとしたら、質が悪い。理解させるまでこいつと話すことになる……と、そこでさらなる衝撃があった事に気が付

いた。

「俺お前と喋ってる」

思いがけない衝撃に声が出た。

霊との会話。もちろん俺にそんな能力はない。だから一瞬、自分が死んだのかと疑った。だが、そんな覚えもない。それに間違いなくさつき瑠美とも会話した。生きてる証言者はいる。

だが、こいつは間違いなく死んでいる。じゃなきゃ、俺の部屋にいるはずがない。二階の窓以外入れる場所などないのだから。入っていたらきつと誰か気が付く。

死んだことを理解してない霊と喋れる。その衝撃に体が震えた。しかし、説得しない限りどうにもならない状況。怒らせないように、さらなる呪いをかけられないように霊との会話を試みる。

「死ねなかったんだろ」

「私まだ死んでない」

「じゃなんでお前ココにいるんだよ。しかも、なんで布纏ってんだよ」

「これは、隠すため」

「死んだことをか」

「違う！」

話すうちにもっと分からなくなる。普通死んだら白い着物を着ていると聞く。それがなぜ身を隠すためにボロ布になるのか。

棄てられたからか。だとしてもボロ布じゃなくていいはずだ。もっと別の服があったはずだ。ボロ布じゃなく白い布でもいいわけだ。着た所で怖いことに変わりはないが。

恐怖に襲われているのに、話が分からないのが混じって顔が険しくなる。そんな俺を見かねたのか霊が顔を突き出した。その姿でな

ぜ寄るのかわからない。

「もういい。ねえ竜王とか王にはなりたくないんでしょ？」

「あ、ああ。それより顔を、」

頷いて霊に顔を離すように言いかけて気づいた。ボロ布の中で青白い瞳が動くのが見えたのだ。死んだら瞳まで蒼くなるらしい。

怒りかけている霊が顔を引かずに言う。

「なりたくないなら、誓って」

「何をだよ」

「誓って。『我竜王の采配より見いだされしもの。健全なる心を持ちてあらゆる者に挑み、誰も殺めることなくそれを慈しむ。裏切りは許すことなく死を持ってそれを返し、恨むことなく死へと旅立つことを。我が身を汝に託し、託されし汝は戦場に我が身を投じ、竜王の名を継ぐ者として約束を果たす』と」

なれた口調で少女が言う。やっぱり俺には謎めいた呪いの言葉にしか聞こえない。

「誓えばお前は消えるのか」

「私は消える」

そう言った霊に俺は頷いた。消えるのなら誓ってもいいと。呪い改め成仏のための念を唱える。

「我竜王の、なんだっけ」

「言えなくてもいいから続けて」

覚えられない俺に霊が怒ったように言った。なんで俺が怒られる

のかわからない。成仏して消えてほしいだけなのに。
霊の後を追うように言う。

「『我竜王の采配より見いだされしもの。健全なる心を持ちてあらゆる者に挑み、誰も殺めることなくそれを慈しむ。裏切りは許すことなく死を持ってそれを返し、恨むことなく死へと旅立つことを。我が身を汝に託し、託されし汝は戦場に我が身を投じ、竜王の名を継ぐ者として約束を果たす』」
「うおっ」

青白い閃光。きつと浄化か何かだ。その途端何かに包まれるような感覚が襲った。消えた。霊の浄化に成功。

眩しさが消えるのを感じて目を開けた。

目の前には窓。下には白いベッド。左右には見慣れた本棚やポスター。確実に俺の部屋だ。

何が起こったのか分からないが安心する。場所が移動したのは恐らく霊の最後の悪あがきだ。悪霊だったのかもしれないが、消えたのならそれでいいと俺はほっと胸をなでおろした。

「何の溜息だ」

「！」

悪寒が走る。恐る恐る錆びれたロボットか人形のように首を後ろに向けた。そして目に飛び込んできたものに叫ぶような声を上げた。

「なんだお前。つか誰だ。霊の置き土産か何か」

ボロボロのようなワンピース調の服を身に着けた小さい女の子が、俺の勉強机のイスにちょこんと座っていた。

「静かにしろ小僧。三度お前は騒ぐのだな」

小さな女の子の口から放たれた口調と声に驚いた。年寄りのような口調。しかし、声は女性だ。見た目に見合う女の子らしい声ではない。

怯える俺に少女が聞く。

「名はなんという？」

聞き間違えかと思うほどに少女の声は不釣り合いだった。

見た目はかわいらしい女の子そのもので、青く澄んだ瞳と青白い髪が目立っている。

一瞬見ただけでは気づかなかったが、イスに座つているといふよりも立っている。それを見ると、歳は9歳がいいところだ。瑠美を思い出せば身長や見た目から見てそうなる。そんな子が年寄りの言葉を使っているのだ。違和感を覚えない方が可笑しい。

さっきの霊が転換してこうなった。だとしたら成仏してないことになる。しかも、さっきより質が悪そうな気がした。やたらと口が悪い。

ジロジロと見る俺を見て、女の子の顔が険しくなる。歳に似合わないややはり怖い。

「名はなんというか聞いておるのだ。名乗れ」

「な、なるかみたつひこ鳴神竜彦」

「竜彦か……………」

いきなり呼び捨ての少女を俺は怪訝な目で見続ける。手を顎につ

けて何か考えているらしい。よっぽど大事な事なのか、それとも名前を聞いたあたりニックネームか何かか。霊みたいな少女にいきなりそんなものつけられるのかもしれない。だとしたら嫌だ。まるで本当に憑りつかれたみたいじゃないか。

そんな風に沈黙が破れるのを待つ俺に少女が顔を向けた。

「凡庸すぎる」

「はっ!？」

衝撃だった。なんだ凡庸って。

「前は楠瀬くすせだった。今度は竜彦か……頼りないがまあ仕方ない」

凡庸と言われ悪いかと言いかける。世渡りする霊だということがわかった。楠瀬という奴は知らないが、俺で二人目らしい。前の奴はどうしたのか聞くのが恐ろしくて止めた。死んでたら、俺が死ぬことになる。それを聞くほどの勇氣はない。

仕方ないと言われて腹を立てる俺の氣を知らず、霊は目を見つめ返してきた。

「竜彦、お前に頼むことは一つだ。我を守れ」

「はっ!？」

俺は大声を出して固まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3190ba/>

竜王の系譜（仮）

2012年1月8日09時52分発行